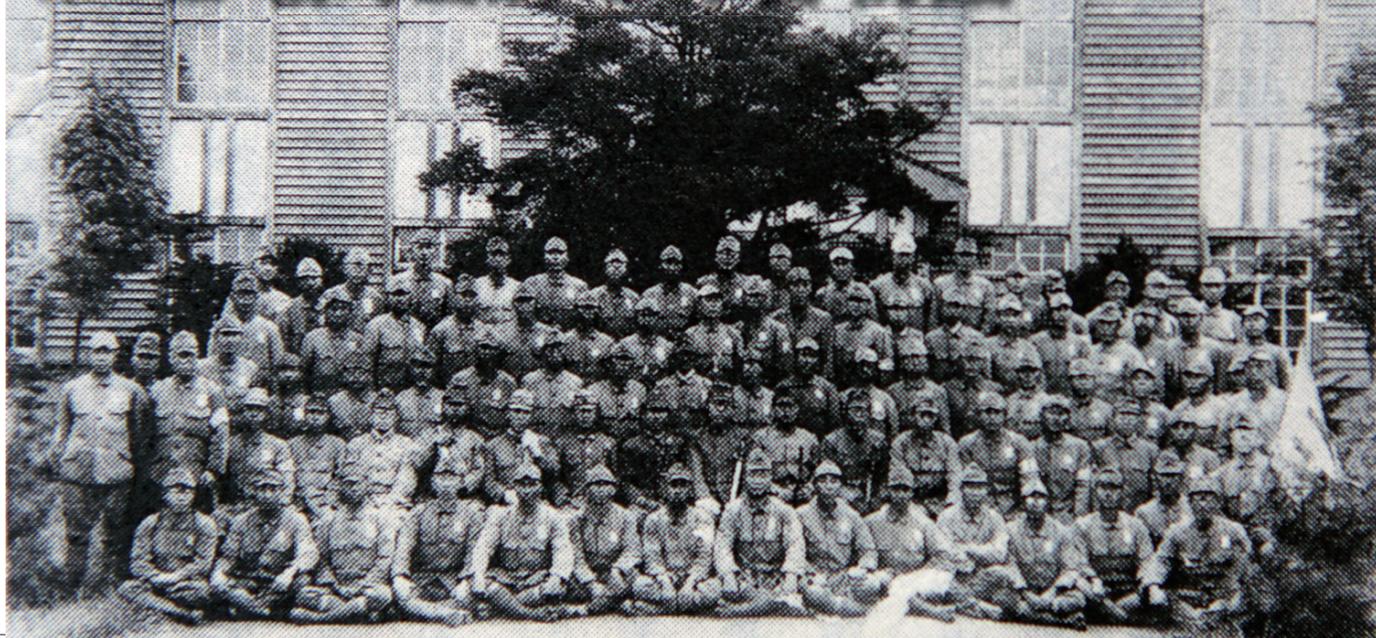


第8話 戦時当別の今昔物語



京都府立京都農林学校生徒による援農活動

昭和18年7～8月、軍隊への召集などによる農村の労働力不足に対し、食料の増産を行うためにはるばる京都から100名以上の生徒が来村し農作業を手伝った。全久寺と弁華別国民学校（現弁華別小学校）に分宿し、村でも慰安会を開催するなど交流も行われた。背景は弁華別小学校（写真：百年の星霜 茂平沢開拓記念誌）



当別からの出征の様子

出征者は必ず「命を捧げて、お国のためにつくします」と決意を述べ見送りのバンザイで出発しました。日華事変までは駅前での盛大な見送りでしたが、敗戦の色が濃くなるにつれて箱口令がひかれ、ひっそりと出発しました。

（写真：材木沢開基110年記念誌）

平和な農村の農地は荒廃

人々はつらい思い出をも胸にしまいこんだ

①戦争と地方の記憶

今年戦争終結65年、日本人にとって忘れてはいけない8月15日がやってきます。この町でも日清、日露、太平洋戦争といった国運をかけた戦争に305名の尊い命が犠牲となりました。

太平洋戦争は中でも最も凄惨を極めた戦いで、国民も国土も壊滅的な荒廃を招きました。その終盤、1945年に入ると東京は連日のように空襲を受け、沖縄では国内初の地上戦があり、7月15日には隣接する石狩をはじめ、全道各地でも空襲の被害を受けました。当別ではそのような直接的な被害は受けなかったものの、2,151名が出征し、271名が故郷の土を踏むことなく命を落として

います。また、帰還兵も心に深い傷を負っていたのです。

②人手不足と食料増産命令

戦時下における諸団体は全て戦争遂遂に向けての活動となりました。1940年、内務省令により全国に隣組が設置、更に各政党は解散させられ、大政翼賛会が組織されます。当別村も1941年、町内会、部落会設置規定の施行により、5町内会、19部落会と110の隣保班が組織され、国債の貯蓄、金属の回収と供出、出征軍人の見送り、帰還兵の出迎え、防空演習の統制などは部落会を通じて行われました。

働ける男子は召集を受けるほか、農耕馬の徴発、肥料の不足

など食料生産条件が悪化する中、1935年から5年間で本村の作付面積も約90%減少します。このような悪条件の中で食糧増産は強く要求されたため、村では「緊急食料増産突撃隊本部」を設置し現地指導のほか婦人会、学徒、児童まで食糧生産に動員されました。

農家は自己食料米を削ってまでも供出しなければ司法権（強制供出）が発動されるとあって、主食はヒエ、粟、イモ、かぼちゃ、とうきびに代わっていきました。

1 人の所有するものを強制的に取り立てること



③ 青い目の人形

激戦中の1943年、弁華別国民学校に大切に飾られていた青い目の人形は、全国の学校に保管されていた1万体制のものと共に受難のときを迎えていました。人形の名は「エリザベス・アーン」。日本とアメリカの関係が良好な時代に「こどもたちからの日米親善」を目的に1万2千体制の人形が全米各地の婦人ボランティアが着せた服をまとめて1927年に日本にやってきました。北海道には643体が各市町村に分配され、盛大な歓迎行事が行われました。当別村内では当別小、東裏小と弁華別小へ配分されました。弁華別小学校の子どもたちは、はかまを着て当別小学校まで迎えに行きましたが、初対面の人形はセルロイド製で珍しく、寝かせると目を閉じる



など当時の女の子の夢を膨らませました。女生徒たちは独りでは寂しかりとみんなで2銭ずつ出し合い、日本人形の「おともだち」を横に並べて、学芸会の劇にも出演したといひます。その16年後、不幸にも敵国から来た人形を処分すべしとの声が各地であり、かつて少女たちの夢であった青い目の人形は竹やりで刺されたり、石油をかけて燃やされるなど処分されていきました。そんな中、弁華別の「エリザベス・アーン」は人知れず行方不明になっていました。ふたたび子ども達の前に現れたのは1973年、弁華別小学校の辻岡校長が階段下の物置の奥から人形を発見したのです。校長は1943年当時、浦河国民学校で人形の破壊現場に立ち会った経験から、すぐに傷んでいた人形を修復し、古老の方に尋ね歩き、その人形が「エリザベス・アーン」という名前であることを確認しました。



どうして「エリザベス」は生き延びることができたか？

戦争時、当別村の校長会でも人形を焚殺ふんさつすることが申し合わされていきました。しかし当時の井村校長は子ども達の心を考えた時、実行できなかったの

です。そこで千葉教頭と2人で物置の奥にそっとかくまったのです。北海道では19体の存在が確認されています。

④ 女性の戦い

出征兵士を出した家庭の女性たちは寂しさを感じる暇も無く家庭を守るために必死に活動しました。戦争で亡くなった人たちの葬式は村が執り行っていました。戦局が激しくなるとそれもなくなくなります。家族のうちで戦死した時は人前で泣くこともできなかったのです。

一戦争中は国防婦人会があつて襷たすきかけて出かけましたよ。そして竹やりをもってね。敵がきたら竹やりでつつくような話をしてね。そんなことできるものではないんだけどね。金物を出したわね。「なんの金物がある」というところにみんなで行ってもらってきましたわ。茂平沢でも兵隊に行つて亡くなった人がおります。出征兵の見送りに当別駅まで行きました。(茂平沢開拓記念誌、回顧録より)

■参考文献

当別町史 (1972年)
あそいわ (1983年) 弁華別開基100年記念誌
百年の星霜 (1990年) 茂平沢開拓記念誌
材木沢開基110年記念誌 (1992年)
悲しみは松花江に流して (1987年)

■情報課広報聴係

☎ 23 - 3069

当時の馬は、農家にとって重要な労働力で家族も同然でしたが、乗馬用、荷物の運搬用に徴発ていぱつされました。

神社で「武運長久ぶうちょうきゆう」を神に祈った後、軍事用に訓練され送り出されました。その多くが中国大陸へ渡り、生きた兵器として利用されましたが、70万頭ともいわれる軍馬で帰ってきたものはほとんどいないのです。

徴発を受けた軍馬は兵士の出征と同様、賑やかに送り出されました。写真は材木沢の城戸政次郎氏の旭号 (写真：材木沢開基110年記念誌)

一戦争前後、食べ物も子どもたちはまずいものでも間に合いました。強権発動にかからなければね、農家をしているんですからたいしたことはなかった。それが親戚にお産した人があったので、ちょっとお米をあげたのが足になり、六軒町にいたお巡りさんが訊ねてこられるのですね。その当時、苗を立てる時、バケツで水を汲んでいたんです。ホースもポンプも無いしね。その鉄板バケツを買ったのでも、お巡りさんが「これどうして買ったか」とかね、根ほり葉ほり根元まで聞かれ、言わなければ

いけなかったんですよ。（茂平沢開拓記念誌、回顧録より）



弁華別国防婦人会

戦死者の遺族や傷病軍人の援護を目的とした婦人団体が各地で設立され、当別村でも大日本婦人会の末端組織で戦争遂行の役割を担っていました。（写真：茂平沢開拓記念誌）

⑤戦争を語り継ぐ

昭和28年戦没者の家族により当別町遺族会が結成され、遺族の交流と戦没者の霊を弔う行事を行っています。年月が過ぎ、戦争の犠牲や事実を語る事が難しくなりつつあります。

今を生きる私たちは、実体験者の記録や生の写真を風化させることなく、戦地の悲惨さはもとより、戦争に至った歴史的背景、子ども達や一般生活者から見た戦争を知り、悲惨な戦争を教訓として平和な社会を築いていかなければなりません。

インタビュー

戦争体験は、特に出征された方にはいまだに語りにくいものです。私は母の薦めもあり、看護婦の資格を得て1943年に新潟県長岡市の日赤病院に勤務後、満州(当時)の大連にあった陸軍病院やチチハルの飛行部隊で従軍看護婦として働きました。1945年8月、終戦とソ連軍の侵攻で満州では悲惨な逃避行が始まりました。日本の占領から解放された中国人も行く手を阻み、ソ連兵がピストルを持って迫ってきましたが残された女性や子供だけでは抵抗のしようもありません。收容所に収監され、集団生活が冬を迎える頃、シラ

涙も枯れた2度の戦争！

ミだらけの死んだ人の衣類を剥ぎ取ってまでも、寒さをしのいだのです。極限に達すると人間は悲しみや恐れなどの感情も麻痺して、涙も出ないものなんですね。

1946年6月、收容所に来た江別出身の保健婦の方と、中国人の軍医が「生命と衣食住を保証する」との約束で、状況の判らないまま八路軍(後の中国人民解放軍)の野戦病院で働くことになりました。当時、アメリカの支援を受けた国民党軍と中国共産党が「国共内戦」を始めていたのです。私は看護婦という職業を活かしたいという一身でしたが、囚らずもまた戦闘の真っ只中に放り込まれたのです。おびたしい中国の負傷兵、患者が送り込まれ、主に日本人の医師と看護婦により休む暇も無く手術が行われました。

1949年に中国は中華人民共和国になりました。私は北京や成都での人民病院の勤務を経て1958年7月に生後3ヶ月の息子を持って帰国することができました。その後も札幌市内の病院で働き、総婦長も経験し退職を迎えましたが、その頃、当別に縁があって住



長岡の日赤病院で勤務していた頃

むことになりました。中国軍に従軍した働きが認められて、近年、中国政府に招かれるようになりました。私の青春は全て戦争だったわけですが、生き延びさせてくれた中国に少しでも恩返しをと、中国からの留学生の受け入れ、華僑のお世話など、今では中国と日本の平和に役立ちたいと活動しております。戦争は出征した兵士もそうでしょうが、留守の家と家族を守った女性の他、戦場で働いた女性も多く、私の心に辛く悲しく刻まれています。

山崎幸さんの辛い経験は「悲しみは松花江に流して」(にじ書房)に詳しく描かれています。



山崎 幸さん
(美里在住 83歳)